7　C^{14}年代測定法による各時期の年代観

ここでは，各時期の存続期間を概ね把握するために，C^{14}年代測定法のデータを利用して大まかな年代観を考えてみる。なお，年代観の基準はＡＭＳ法を基準とし，暦年換算[9]についてはここでは考えていないことを断っておく。

（1）Ⅱ期

仁田尾遺跡の測定の報告がないため，現時点では不明である。しかし，次に述べるⅢ期のC^{14}年代観をふまえ，ＡＴ降灰の時期を概ね25,000年と考えると，現在のところ24,000年前後の年代が当てはまるのかもしれない。

（2）Ⅲ期

該期は石器群の検出例や礫群の検出例が多いことからC^{14}年代測定資料も多く報告されている。

前山遺跡ではⅧ層礫群の炭化物から約22,000yBP（ＡＭＳ法）が報告されている。

帖地遺跡ではⅩⅣ層礫群の炭化物から18,580±360yBP（β線法）が報告されている。

前原和田遺跡ではⅩⅥ層礫群の炭化物から約20,830，18,820yBP（β線法）がそれぞれ報告されている。

桐木遺跡ではⅩⅦ層礫群の炭化物から24,050±110，24,020±170，24,270±180，22,960±170yBP（ＡＭＳ法）[10]がそれぞれ報告されている。

耳取遺跡ではⅩⅦ層礫群の炭化物から24,030±110yBPが報告されている。

以上のデータから，また，β線法がＡＭＳ法より比較的新しい数値を出す傾向があることを勘案して，現在のところ24,000年前後～20,000年を想定しておきたい。

（3）Ⅳ期

該期の報告例は少なく，前原和田遺跡でⅩⅢ層の礫群の炭化物からの数値で約18,000yBP（ＡＭＳ法）というデータがあるのみである[11]。現在のところ18,000年前後を想定しておきたい。

（4）Ⅴ，Ⅵ期

該期についてのデータは現在のところ存在しない。仮に細石器の開始を13,000年前後とすると，単純にⅤ期とⅥ期は18,000年前後～13,000年前後の間となろうか。今後の資料に期待したい。

8　まとめ

過去の編年案をもとに新資料を追加して主に層位，石器組成，石器製作技術の３つの点から本県のＡＴ降灰以降のナイフ形石器文化期の石器群について現段階の理解をまとめてみた。また，石器の小型化についても数値データにより客観的に実証できた。ただし，これらは個々の遺跡の特徴で，県内においても必ずしも一般化できない部分もある可能性があるが，現時点での認識として，また，今後の該期の石器群研究の一ステップとして理解していただきたい。今後は地域性を視野に入れ，個々の石器の技術的な推移を詳細に追っていく作業が課題となる。また，石材選択の地域性等も含めて検討していく必要性も感じている。

【 註 】

1 縦長の剥片の側縁に鋸歯状の刃部を形成する石器である。宮ヶ迫遺跡の報告書中で設定を行っている。
2 報告者は剥片尖頭器については出土地点が離れているため他の石器群との共伴は断言できないとしている。
3「6　石器の小型化について」参照。
4 報告者は三稜ナイフと呼称している。
5 古環境研究所の分析では正式にはATの風成再堆積層という。
6「小型」「中型」「大型」等の規格の表示については，第６章の分析に基づくものである。
7 宮ヶ迫遺跡報告書 「第６章　分析・考察」による。
8 宮ノ上遺跡の位置づけについては，雨宮瑞生，松崎卓郎，鎌田洋昭の論考があり，雨宮，松崎は福井７層との関連からや概ねナイフ形石器文化期の終末期（筆者編年Ⅵ期）に位置づけている。鎌田は「もう少し検討が必要」として位置づけを保留している。筆者も宮ノ上遺跡の縦長剥片はナイフ形石器の素材剥片であるという認識については同感である。しかし，福井７層との直接的な比較はまだ距離感があり，地元の石器群との対比がまず必要であると考えている。筆者は「6　石器の小型化について」での基部加工ナイフ形石器の分析結果から，宮ノ上遺跡のように縦長剥片の規格が４cm前後の石器群はⅤ期にみられることから，当石器群についてはⅤ期（床並Ｂ遺跡，露重遺跡の一段階前）に位置づけられると考えている。
9 改訂新版『地層の知識』2000より。
10『考古学ジャーナル』の報告には分析手法は掲載されておらず，長野眞一氏のご教示による。
11 報告書の本文中に，「炭化物の量が少なく，特定するには今後充分な検討が必要である」という記述があることを断っておく。

【参考文献】

牛ノ濵　修　1995 「仁田尾遺跡の発掘調査外報」『考古学ジャーナル』390
鹿児島県立埋蔵文化財センター　1994 「鹿児島県松元町仁田尾遺跡」『旧石器考古学』49
鎌田洋昭　1997 「ナイフ形石器文化の終末の様相と細石器文化の開始について」『九州の細石器文化』
　　　　　1999 「今峠型ナイフ形石器について」『人類史研究』第11号
上村純一・雨宮瑞生　1997 「第一項　旧石器時代の遺跡」『川辺町郷土史追録』
桑波田武志・宮田栄二　1997 「鹿児島県旧石器時代研究の現状と課題」『鹿児島考古』第31号
桑波田武志・鶴田静彦　1997 「ＡＴ下位から細石刃文化期までの複合遺跡－日置郡松元町前山遺跡－」『旧石器考古学』55
長野眞一　1979 「小牧３Ａ遺跡の紹介」『指宿史談』
　　　　　2000 「旧石器時代の人体型石製品－耳取遺跡－」『考古学ジャーナル』
　　　　　2001 「耳取遺跡」『旧石器考古学』61
中村守男　2002 「最近の調査例について（小原野遺跡）」『石器原産地研究会 第２回研究集会』
町田洋・新井房夫・森脇広　2000 『地層の知識第四紀をさぐる』東京美術
松崎卓郎　1997 「南九州におけるナイフ形石器文化終末期の様相」『人類史研究』第９号
宮田栄二　1996 「仁田尾遺跡」『日本考古学協会』
　　　　　2002 「南九州ナイフ形石器文化の集団と領域に関する予察」『九州旧石器』第６号
綿貫俊一　1982 「東九州における瀬戸内系の人類遺物」『旧石器考古学』25